

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 谷一 尚

本論考の目的は、その冒頭にあるように、19世紀以来、営々と構築されてきた古代ガラス史の、未だ解明されていない空白部分を、最新資料あるいは著者自らが発掘した確実な資料を可能な限り活用・考察して埋めることにある。

第1部の第1章は、単体としてのガラス成立以前の、施釉石、ファイアンスなどのガラス関連物質に関する考察である。Lucas, A.、Moorey, P. R. S.らの先行研究に、著者が独自に収集した資料を加えて、金属精錬とガラス技術とが密接に関連していることを指摘し、ガラスの起源について論じている。第2章は、紀元前2千年紀のメソポタミアのガラスについて、トルコのボアズキョイ出土のガラス珠鑄型など最新資料を用いて、鑄造ガラス珠の技法と流通の問題を考察する。第3章は、エジプト新王国18王朝におけるガラス製作の技法と実態の考察であり、第4章では中近東と中国から出土する同一型式のガラス珠の比較を通じて、中国への伝播年代とそれがもたらした影響関係を論じる。第5章と第6章では、中国から出土するローマ・ガラスの埋蔵年代がローマ世界での製作年代と20ないし30年しか変わらないことを詳細な資料操作で証明している。このような考察に必要とされるローマ・ガラスの製作年代と製作地を同定するため、第7章でガリア出土の多くがシリア・パレスチナ製であることを新たな整理分類で提示している。

東アジアで出土する紀元3世紀から7世紀のガラスが、ローマ・ガラス、ササン・ガラス、あるいは中国製もしくは現地製であるのかを論じたのが第9章、第11章、第12章である。当該問題の解明のために筆者は同じソーダ石灰系であるローマ・ガラスとササン・ガラスのあいだにもマグネシウムとカリウムの含有量に相違があることに着目し、天然ナトロン（天然ソーダ）の入手が容易な地中海世界と砂漠の植物灰を用いるササン朝とのガラス材料の違いを明らかにするより科学的な分類によって新たな比定を行っている。

第8章、および第10章は、東京大学イラン・イラク調査団の発掘資料を再検討すると同時にそれらの資料を用いて、ローマ・ガラスとササン・ガラスとを明確に分類している。第13章は、敦煌壁画に描かれたガラス容器の変遷から、法隆寺壁画の製作年代を推定しようとするものであり、第14章は、中近東で作られたガラス容器が舍利容器などに転用される例を中国、朝鮮の出土例から考察している。また、第15章では、著者が中国で発掘した初唐期中国製高鉛ガラスなどの新資料を用いて、正倉院蔵ガラス容器につながる過程を解明し、第1部の最終章である第16章では、遼の貴族墓から出土したイスラーム・ガラスに焦点をあて、中国世界とイスラーム世界とのガラスおよび銀の交易を詳細に論じている。

第2部は第1部の考察を進めるに当たっての先行研究の検討および基礎資料の紹介である。

以上の内容から明らかなように、著者は本論考でガラスの起源と考えられる紀元前5千年紀から紀元1千年紀までの地中海世界、中近東、中央アジア、それに中国、韓国、日本などの東アジアという広大な範囲を視野にとらえ、ガラス工芸の変遷と伝播、そしてガラス技術の展開を考察している。この考察を進めるに当たって、著者は自ら中国等での発掘を行うだけでなく、成分分析に関して自然科学者と共同研究を行い、より科学的な資料と分析・解析データの収集に務めている。その結果本論考は、未だ解明されていない空白部分の充填への貢献によりガラス史研究にあらたな展望をひらく基本書となりうるものであり、博士（文学）の学位を授与するに十分値する論文であると判断する。